

# 「主体性」を發揮させる指導と評価の工夫

—学びを意味付け、つなげることができる生徒の育成—

高校教育研究会議

山本 大<sup>1</sup> 佐藤 辰徳<sup>2</sup> 荒井 貴文<sup>3</sup> 津田賀 裕美<sup>4</sup> 森山 麻衣子<sup>5</sup>

## 要 約

学校教育は、これからの予測困難な時代に、変化し続ける社会に主体的に関わり、持続可能な社会の担い手となる生徒を育成することが求められている。高等学校においても、生徒が生涯学び続けるために必要な資質・能力の育成に向け、学習指導と学習評価について、様々な授業改善が進められている。

しかし、依然として、現行の学習評価の観点の一つである「関心・意欲・態度」については、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていないとの指摘もある。川崎市立高校の教師を対象に行ったアンケート調査でも、「関心・意欲・態度」の評価に対して不安や困難さを抱えている教員が多いという現状が把握できた。

一方、日本の高校生が、授業に対して受け身であることや、学校での学びが将来役に立つと考えている生徒が7割に留まる<sup>1</sup>ことが全国的な調査から明らかとなっている。川崎市立高校の生徒を対象に行ったアンケート調査では、学ぶことの意義を感じている生徒が多い反面、学ぶことの目的が「社会の役に立つ人になるため」と考える生徒の割合は少ないことが分かった。

このような現状を踏まえ、本研究会議では「主体的な学び」を、生徒が学びを人生や社会に生かそうとしていることと捉えた。そしてこれを育成するため「主体的に学習に取り組む態度」の評価の改善から授業改善に取り組んだ。

生徒の「主体的な学び」を教師が見取るため、学習に関する自己調整の側面について、生徒が学びに役に立つものとして意味付け、次につなげることで、自分の人生や社会に生かそうとしているかという視点で可視化した。合わせて粘り強さの側面としては、「主体性」と近い概念である「自律性」の程度に着目した「有機的統合理論」を用いて可視化した。

指導の改善としては、振り返りを効果的に行う手立てとして、生徒が見通しをもつことができる「単元ごとの学習計画」や生徒が各教科の見方・考え方を働かせることができる「課題設定」を行った。振り返りの記述の評価については、2つの段階を設けて教師間で共有できるようにした。

その結果、振り返りの記述には、生徒が学びをつなげることができていると認められるものがみられた。生徒を対象に行った事後アンケートには、振り返りを効果的に行うための手立てが有効であったことを示す記述があった。さらに、生徒が振り返りを行うこと自体が、さらに生徒の意欲を引き出し、「主体的な学び」を促すということが確認できた。

キーワード：主体性、有機的統合理論、振り返り、意味付け、つなげる

## 目 次

I 主題設定の理由……………74	5 主題設定……………79
1 これからの時代に求められる 資質・能力……………74	II 研究の内容……………79
2 「主体的に学習に取り組む態度」 の指導と評価……………74	1 現状の把握……………79
3 高等学校の学習評価に関する 実態と課題……………75	2 「主体性」を發揮させる授業づくり…81
4 研究の方向性……………76	3 検証授業……………83
	III 研究のまとめ……………91
	1 成果と課題……………91
	2 研究全体について……………92

<sup>1</sup>川崎市立高津高等学校教諭（長期研究員）

<sup>2</sup>川崎市立橘高等学校定時制教諭（研究員）

<sup>3</sup>川崎市立川崎総合科学高等学校教諭（研究員）

<sup>4</sup>川崎市立幸高等学校教諭（研究員）

<sup>5</sup>川崎市立川崎高等学校教諭（研究員）

# I 主題設定の理由

## 1 これからの時代に求められる資質・能力

高等学校は、令和4年度から新学習指導要領が全面実施される。各学校において、これからの時代に生徒に必要な資質・能力を育成するための新学習指導要領への移行は、通知に基づいて移行措置が始まっている。新高等学校学習指導要領解説総則編では、改訂の経緯の中で、これからの予測困難な社会の変化に「主体的」に関わり、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であることが述べられている<sup>1</sup>。このために、「生きる力」の必要性が再確認され、さらに「生きる力」を具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理された。

これを受け、本市「市立高等学校改革推進第2次計画」（令和2年）の中でも、社会の変化に主体的に関わり、よりよい社会と豊かな人生の創り手となる力を身に付けることの必要性が示され、「新たな価値を生み出す豊かな創造性」、「グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力」、「地域や社会における産業の役割を理解し、地域創生等に生かす力」という三つの具体的な資質・能力の育成を目指すことが示されている<sup>2</sup>。

また、本市総合教育センター研究主題も今年度より、「自己実現を図り、持続可能な社会を創る資質・能力の育成」となっている。

これらに共通点することは、これから迎える予測困難な時代において、刻々と変化する社会に対応し、新しい価値を創造していくためには、「生きる力」が重要であり、そのために必要な力としての資質・能力の育成が求められるということである。

## 2 「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価

そのためには、資質・能力の三つの柱をバランス良く育成する必要があるが、その中でも、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）」に注目すべきであると考ええる。

その理由として、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」とする）（2016）では、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力を「どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素」とあり、「学びに向かう力・人間性等」が、他の二つの育成に大きく影響するという点が示されていることが挙げられる。さらに、中央教育審議会の「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（以下「報告」とする）（2019）では、「学習評価と学習指導を通じて『学びに向かう力・人間性等』の涵養をはかることが、生涯にわたり学習する基盤を形成する上でも極めて重要である」とあることが挙げられる。

次に、学習評価・学習指導という視点でみると、「学びに向かう力・人間性等」には、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分と、観点別評価や評定にはなじま

<sup>1</sup> 文部科学省 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』 p. 3

<sup>2</sup> 川崎市教育委員会 「市立高等学校改革推進計画 第2次計画」 p. 12

ず、個人内評価を通じて見取る部分があることに留意する必要があるということを踏まえる必要がある。

そうすると、学校教育では、学習活動を充実させ、「主体的に学習に取り組む態度」の観点の指導と評価を改善していくことが必要だといえる。

さらに、「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価について、「答申」では、「子供たちが自ら学習の目標をもち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。」と記されている。生徒の粘り強さや自己調整などの意思的な側面、つまり、生徒の取組をしっかりと見取ることができるような学習活動を位置付けることが必要である。

### 3 高等学校の学習評価に関する実態と課題

#### (1) 学習評価についての課題

「答申」では、「現行の『関心・意欲・態度』の観点について、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていない」という課題が長年指摘されていたことから、観点を「主体的に学習に取り組む態度」に改めたという記述がある。さらに、「こうした観点別の評価については、小・中学校と高等学校とでは取組に差があり、高等学校では、知識量のみを問うペーパーテストの結果や、特定の活動の結果などのみに偏重した評価が行われているのではないかと懸念」も示されており、高等学校教育においても、「観点別学習状況の評価を更に普及させていく必要がある」と述べられている。

#### (2) 高等学校の観点別評価についての実態

高等学校の教師が「関心・意欲・態度」についてどのように見取っているかという実態を把握するため、文部科学省が平成29年度に教員向けに行った「学習指導と学習評価に対する意識調査」の結果を見ていくこととする。

調査によると、高等学校では、観点別学習状況の評価において、「知識・理解」に重点を置くという回答が最も多く、次いで多かったのは「関心・意欲・態度」よりも他の観点到重点を置くという回答であった。(表1)

また、「その他」に分類した回答として、評定の決定について、観点別の評価ではなく、より直接的に定期考査やテストの結果を重視するという回答があったことも述べられている。

このように見てみると、高等学校では、「関心・意欲・態度」の評価において、必ずしも生徒の意思的な側面をしっかりと見取って評価しているといえず、そのかわりに数字やはっきりとした形となって表れやすいものに置き換えて評価している傾向が強いことがうかがえる。

表1 「学習指導と学習評価に関する意識調査」(高校)

ある観点到他の観点到重点を置いて評定を決定している場合の内容

「関心・意欲・態度」よりも他の観点到重点	34.4
「関心・意欲・態度」に重点	7.3
内容等に応じて	7.5
「技能」に重点	15.8
「思考・判断・表現」に重点	5.3
「知識・理解」に重点	36.2
その他	12.3

#### (3) 高校生の授業に対する意識の実態

平成29年3月発表の国立青少年教育振興機構の「高校生の勉強と生活に関する意識調査」という調査がある。この調査によると、アメリカ・中国・韓国と比べて、日本の高校生は「授業中きちんとノート

をとる」割合が高いことから、授業に参加しているように見えるものの、「授業中、居眠りをする」の割合が米中韓に比べて高いことから、授業への積極的な参加という面では低い傾向にあることがわかる。(表2)

表2「高校生の勉強と生活に関する意識調査」

	日本	アメリカ	中国	韓国
ノートをきちんととる	79.4	60.8	67.7	50.8
授業中の居眠り	15.0	3.8	3.3	8.4

#### (4) 高校教師と生徒の実態

日本の高校生の特徴として、ノートはきちんととるが、居眠りが多いという結果は、教師が何を評価しているかということと関係が深いと思われる。

例えば、ノートをきちんととるのは、板書事項をノートにきちんと写しているかどうかの評価されるからであり、テスト勉強に大きな労力をかけるのは、テストの結果(点数)が評価の大きな重点を占めるからであるといえる。そのように考えると、授業中に何を考えて、どのように活動しているかということがあまり評価の対象とされないこと、つまり指導に生かす評価への取組が十分でないことが、高校生の授業への参加の実態として表れていると考えることができる。

一方、高校生が学校の授業に対してどのように考えているのかを明らかにするため、平成30年9月に学研教育総合研究所が行った「高校生の日常生活・学習に関する調査」に注目した。この調査では「学校で学んでいることが将来役に立つと思うか」という質問に対し、高校生全体の3割以上が否定的に回答し、さらにその割合は学年が上がるにつれて高くなることが分かった。(表3)

表3「高校生の日常生活・学習に関する調査」

		とても役に立つ	まあまあ役に立つ	あまり役に立たない	ほとんど役に立たない
今学んでいることは自分の将来に役に立つと思いますか	1年生	20.5	55.0	15.5	9.0
	2年生	14.5	54.5	20.0	11.0
	3年生	18.0	46.5	25.0	10.5
	全体	17.7	52.0	20.2	10.2

原因としては、「学年が上がるにつれて学習の難易度が上がること、受験に特化した学習や成績のプレッシャーが増すこと」などが挙げられている。

## 4 研究の方向性

### (1) 川崎市立高等学校の実態

川崎市立高校は全日制5校、定時制4校の、合わせて9校であるが、学科数は普通科を含めて12学科と多種多様である。全日制の生徒数で見ると、生徒数約3700人の内、普通科の生徒が約2000人であり、専門高校やその他の専門学科の生徒数が約1700人である。普通科の生徒比率は55%であり、全国の普通科高校生の比率73.1%(平成30年5月 文部科学省)と大きな差がある。専門高校やその他の専門学科には、中学校卒業段階で明確な将来の目標を持って入学してくることが多いので、改めて川崎市立高校生の学習に対する意識を把握する必要があると考えた。

また、そのような具体的なニーズに対応するため、教師の側にも様々な考え方や方法があると考えられるので、市立高校教員に対する意識調査を行い、現場の教員が抱えている観点別の評価に対する課題や、評価方法を整理し把握する。

### (2) 市立高等学校教師の実態

今年度、川崎市立高校の教師に学習評価に関するアンケート調査を行った。以下に示すコメントは、観点別学習状況の評価の「関心・意欲・態度」の観点について、課題だと感じている部分について質問した項目の回答のうちで、複数あげられていたものをまとめたものである。

「目で見えるものしか評価できない」

「数値化できない」

「生徒の性格が大きく反映されてしまう」

「挙手や提出物の内容、発表等では正確に測れていないと感じる」

「生徒の状態によって評価が極端に振れてしまう」

「評価者によって差が出てしまうと感じる」

「教科で統一した基準を考えていくべき」

このように見てくると、市立高等学校の教師は、「関心・意欲・態度」の観点で評価すべき生徒の意欲など、意思的な側面をうまく見取することに課題を抱えているということがみえてくる。

また、評価の方法についてもテストの点数だけにとらわれない様々な試行錯誤が行われているものの、正しく評価ができているかという不安を抱えている様子がみられる。

さらに、教師が生徒同士を比較することで評価に影響を及ぼしてしまうという懸念により、自信をもって評価することを躊躇している内容の記述からは、基準となるものを求めているが、教科や教師の共通認識としての取組が不十分であるという課題が見えてくる。これらの課題はアンケートの他の項目からも読み取ることができる。(表4・5)

表5 「観点別評価」に関する回答

「関心・意欲・態度」の評価に影響を及ぼす度合いをお答えください。					
	対象	影響する	まあ影響する	あまり影響しない	影響しない
1. 中間や期末などに実施する定期テスト	国(H29)	47.8	29.1	14.2	8.9
	市	16.3	29.6	34.7	19.4
2. 授業中の生徒の挙手や発言の回数	国(H29)	33.5	34.4	18.1	14.0
	市	13.3	39.8	31.6	15.3
3. 生徒が調べたり考えたりしたことを記述したレポートや発表	国(H29)	45.6	36.5	9.9	8.0
	市	53.1	42.9	3.1	1.0

「観点別評価」についてどう感じていますか					
	対象	そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1. 観点別評価は観点どうしの関係性が分かりにくい	国(H29)	19.0	47.7	29.5	3.8
	市	19.4	42.9	30.6	7.1
2. 学校における観点別の評価が上級学校への入学者選抜の結果にそぐわない	国(H29)	19.0	39.1	35.6	6.3
	市	27.6	35.7	30.6	6.1
3. 観点別の評価は実践の蓄積があり、定着してきている	国(H29)	7.9	36.6	43.5	12.0
	市	15.3	38.8	36.7	9.2

表4 学習評価への取組に関する回答

学習評価への取組状況				
A: 校内で評価方法や評価規準を共有したり、授業研究を行ったりして、学習評価の改善に、学校全体で取り組んでいる。				
B: 評価規準の改善、評価方法の研究などは、教員個人に任されている。				
	A	どちらかというとA	どちらかというとB	B
小学校	37.0	37.9	19.9	5.2
中学校	33.0	35.0	23.3	8.7
高等学校	14.7	30.7	34.8	19.9
高校(川崎市)	8.2	27.6	31.6	32.7

指導と評価の一体化への取組状況				
A: 学習評価を通じて、学習指導のあり方を見直すことや個に応じた指導の充実を図るなど、指導と評価の一体化に学校全体で取り組んでいる。				
B: 指導と評価の一体化の取組は、教員個人に任されている。				
	A	どちらかというとA	どちらかというとB	B
小学校	27.5	42.7	24.5	5.3
中学校	22.0	39.4	29.4	9.1
高等学校	9.4	30.2	41.0	19.4
高校(川崎市)	5.1	30.6	36.7	27.6

### (3) 「主体的に学習に取り組む態度」の可視化

#### ① 「主体的」な自己調整の可視化

生徒の意思的な側面をうまく見取ることができないという課題を改善していくためには、授業において、生徒がどのように取り組んでいけば「主体的である」のかを整理する必要がある。

「主体的」の意味を辞書で調べると、「他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行うさま（広辞苑）」とある。そこで、学習の場面での「主体的な態度」を考えるため、育成を目指す資質・能力の「(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養)」という資質・能力の柱に着目することとした。生徒が自己の立場で、学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげることができれば、それは「主体的に学習に取り組む態度」に近いといえるだろう。これを踏まえることで、生徒の「主体的」に行う自己調整がみえてくるのではないかと考えた。

#### ② 「粘り強さ」の可視化

次に、もう一つの側面である粘り強さの程度について、「有機的統合理論」を用いてみていくこととする。Deci & Ryan の提唱する「自己決定理論」<sup>3</sup>を、櫻井 (2017) は「人間が学ぶことや働くことなどの多くの活動において、『自己決定的 (自律的) であること』が高いパフォーマンスや精神的な健康、幸福感をもたらすとする」<sup>4</sup>としている。「有機的統合理論」はその「自己決定理論」を構成するミニ理論の一つである。

その特徴としては、今まであまり注目されてこなかった、外発的動機づけによる学習を自律性の程度によって分類した四つのスタイルにある。従来からある様々な理論では、動機づけについては、内発的か外発的かという分類であったため、どうしても好ましい状態にあると考えられる内発的な動機づけのみが研究などの対象になることが多かった。特に、報酬やご褒美などを与えることによって、内発的な学習意欲が低下する「アンダーマイニング現象」に基づく、外発的な動機づけは、むしろ内発的動機づけを弱めてしまうものと考えられていた。だが、外発的な動機づけに注目し、全く無気力なものから内発的な動機づけによる学習にいたるまでを、自律性の程度で整理したことにより、外発的な動機づけにも段階があり、最終的には内発的動機づけに迫ることができるという点が分かったことが重要だと示されている。

「自律性」は、自身の立てた規範に従って行動する性質のことであり、「主体性 (=主体的であること)」と非常に関係の深い概念であるといえる。このため、自律性の程度に着目することで、「主体的に学習に取り組む態度」の粘り強さの程度を可視化することができるといえるのではないかと考えた。

#### ③ 「有機的統合理論」における「主体的に取り組む態度」

「有機的統合理論」における外発的動機づけの四つのスタイルには、自律性の低い順に、「外的調整」・「取入れ的調整」・「同一化的調整」・「統合的調整」がある。その中でもより内発的動機づけに近い「同一化的調整」と「統合的調整」に分

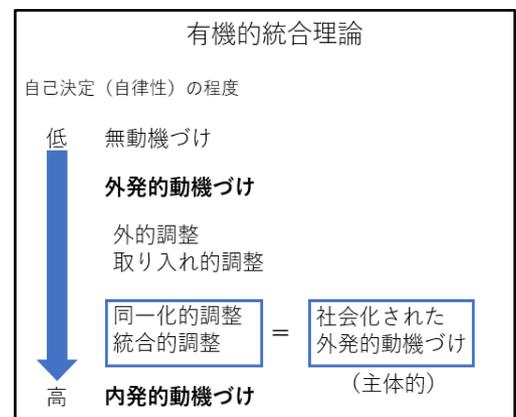


図 1 櫻井 (2012)、吉川 (2020) を元に筆者加

<sup>3</sup> Ryan, R. M & Deci, E. L (2017) Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness. New York: Guilford Publishing

<sup>4</sup> 櫻井 茂男 『自ら学ぶことも 4つの心理的欲求を生かして学習意欲をはぐくむ』(図書文化社) p. 19

類される部分を櫻井(2009)は「社会化された外発的動機づけ(内発的動機づけと外発的動機づけの間)」と呼んでいる<sup>5</sup>。これを受けて、吉川(2020)は、「社会化された外発的動機づけによって行動している状態が『主体的』状態に最も近い」としている<sup>6</sup>。(図1)

図2は外発的動機づけと内発的動機づけを、生徒の学習する理由(動機づけ)に基づいて整理したものである。これによると、主体的状態に近いかどうかは、生徒が学習した内容について、「自分にとって重要、あるいは意味がある」と考えているかどうかで境目となるといえる。

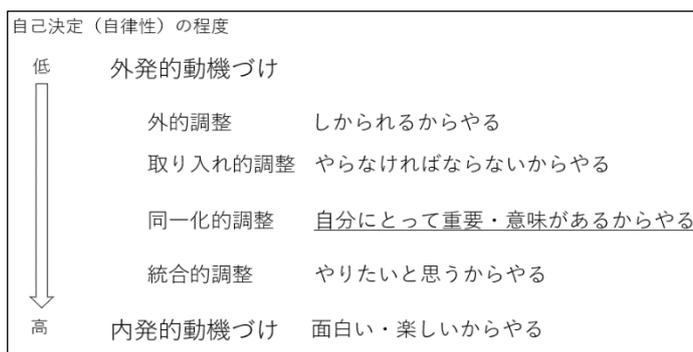


図2 学習する理由(動機づけ)による分類

#### ④「主体的な学び」に向けた授業改善

では、実際の授業を改善していく方向性を

みていくこととする。「答申」では、「主体的な学び」について、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」<sup>7</sup>ような学びだと示している。

生徒が振り返りを書く際に、意味付けの方向性として「学びを次につなげる」という視点を持つことで、生徒自身が自らの学びを可視化することができるようになり、それを評価することにより、教師は授業改善にも生かすことができると考えた。

## 5 主題設定

ここまで述べてきたように「主体性」を整理すると、高等学校における「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価のためには、きっかけや動機づけが他者から行われたものであっても、生徒が授業の中で学びを意味付け、つなげることで、生徒自身が「主体的な学び」を実現することができる。そうすることで、教師は生徒の「主体的な学び」を見取り、評価することが可能となり、授業改善に生かすことができると考えた。そこで本研究会議では、研究主題、副主題を次のように設定した。

「主体性」を発揮させる指導と評価の工夫

～学びを意味付け、つなげることができる生徒の育成～

## II 研究の内容

### 1 現状の把握

#### (1) 川崎市立高校の生徒に対するアンケートの実施

今年度、川崎市立高校の現状を把握するため市立5校の生徒3700人対象(定時制は2クラスのみ)にアンケートを実施した。その結果から分かった現状に合わせた手立てを講じる。

<sup>5</sup> 櫻井 茂男『自ら学ぶ意欲の心理学 キャリア発達の視点を加えて』(有斐閣)

<sup>6</sup> 吉川雅也 関西外国語大学 研究論集 第111号 2020年 p.202

<sup>7</sup> 「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」2016 p.50

### ① アンケートの実施方法と調査数

校内 LAN 環境や指導面の事情から、Google form と紙のマークシートの両方を用意し、各校で選択してもらい実施した。

川崎市立高校の在席生徒3700人の内アンケート回答者数は2654人で回収率は71.7%であった。アンケートの信頼性を示す数値としては、許容誤差±3%（±3%、その数値を挟んで1.5%ずつはずれる可能性がある）、信頼レベル99%（100人中99人は許容誤差内である）であった。

### ② アンケート項目

川崎市立高校に通う生徒の特徴を把握するため、次に示す全国規模で行われた2つの調査とほぼ同じ順序・文言で作成した。元の調査は、国立青少年教育振興機構の「高校生の勉強と生活に関する意識調査」（平成29年）と学研教育総合研究所の「高校生の日常生活・学習に関する調査」（2018）である。

### ③ 生徒アンケートの分析

全国調査と比較すると、川崎市立高校に通う生徒は、「授業中、ノートをきちんととる」という質問に対する回答は、ほぼ全国と同じ割合となっている。一方、「授業中の発言」や「グループワークへの参加」という面では、全国よりも川崎市の高校生は積極性が高いという結果がでている。（表6）これは、小学校・中学校での取組により、学習に対する意欲や主体性が育っていることと関連が深いと思われる。令和元年に行われた「全国学力・学習状況調査」でも、川崎市の小・中学生は「学校に行くのは楽しい」という質問に対して積極的な回答が全国を上回っており（小学校8.6%・中学校8%）、勉強の必要性を問う質問にたいしては、「勉強は大切だ」「どちらかというと大切だ」という回答が、小学校で98%・中学校でも97.3%となっている。

表 6 授業中の態度に関する回答

普段の勉強で、次のことがどのくらいありますか。					
	対象	よくある	ときどきある	あまりない	全くない
授業中、きちんとノートをとる	国(H29)	79.4	16.2	3.4	1.0
	市	76.8	14.4	4.2	1.5
授業中、積極的に発言する	国(H29)	3.7	15.7	47.6	32.9
	市	10.9	25.4	39.9	22.7
授業中、グループワークの時には積極的に参加する	国(H29)	25.3	43.4	24.5	6.8
	市	41.4	40.8	13.0	3.0

表 7 学習の有用感に関する回答

		役に立つ	どちらかというと役に立つ	どちらかというとも役に立たない	役に立たない
今学んでいること(授業)は自分の将来に役に立つと思いますか。	学研	17.7	52.0	20.2	10.2
	市	37.5	47.2	9.5	3.6

今回の調査で、最も顕著な差が出ているのは、「今学んでいること

(授業)が、自分の将来に役立つと思うか」という項目である。自分の将来に役に立つかどうかを判断するためには、自分の将来についてある程度考えたことがなければ判断はできない。この数値が高いということは、自分の将来像を意識して、学ぶことの意義を感じている傾向が高いということがいえる（役に立つ・どちらかというと役に立つ 合計：84.7%）。この傾向は、専門高校やその他の専門学科を除いた普通科の生徒が多い3校に絞っても変わらなかった（役に立つ・どちらかというと役に立つ 合計：82.1%）。（表7）

表 6 学習の目的に関する回答

勉強の目的は主になんだと思いますか。(2つ選択)		
1. 大学進学のため	国(H29)	44.0
	市	58.9
2. 親の期待に応えるため	国(H29)	4.9
	市	5.5
3. 人に尊敬されるため	国(H29)	1.7
	市	2.7
4. 先生に好かれるため	国(H29)	0.6
	市	1.7
5. 将来、希望する仕事につくため	国(H29)	62.1
	市	60.7
6. 社会の役に立つ人間になるため	国(H29)	26.5
	市	19.3
7. 将来、より多くの収入を得るため	国(H29)	16.2
	市	16.8
8. 自分の人間性を高めるため	国(H29)	20.3
	市	20.4
9. その他・わからない	国(H29)	9.5
	市	9.3

\*「1. 大学進学のため」は普通科の生徒が多い3校では、67.2%

また、勉強の目的を問う質問に対しては、「大学進学のため」が 58.9%と最も多かった（普通科が多い3校では 67.2%）が、「社会の役に立つ人間になるため」が 19.3%と全国と比べて低いことが分かった。

この結果から考えると、自分の将来に役立つという意味で大学入試のために勉強する必要を感じてはいるが、社会に貢献しようとする意識は、まだもてていないという現状がうかがえる。（表8）

これらの結果から見ると、「今学んでいることが、自分の将来の役に立つと思う」と考える傾向が強い一方で「社会の役に立つ人間になるためという」意識が低いという傾向が浮かび上がってくる。そのような生徒に対して、学んだことを振り返る中で、それぞれの「学び」と、自分の人生や社会とのつながりを意識して確認し、一人一人が学び続けることで達成される自己実現が、社会を創ることにつながっていくのだということを示すという面でも意味がある。

「答申」でも、『生きる力』の育成と、学校教育及び教育課程への期待」の部分で、「こうした力の育成は、学校教育が長年「生きる力」の育成として目標としてきたものであり、学校教育がその強みを発揮し、一人一人の可能性を引き出して豊かな人生を実現し、個々のキャリア形成を促し、社会の活力につなげていくことが、社会からも強く求められているのである。」<sup>8</sup>と述べられている。

## 2 「主体性」を発揮させる授業づくり

今まで、生徒の「大学進学のため」というニーズに応え、試験範囲を全て終わらせるという思いから、一つの単元が終われば、すぐに次の単元に進むことが多くあり、高等学校では小・中学校に比べ、振り返りは盛んに行われてこなかった。しかし、本研究会議では、「主体的な学び」の実現のためには、生徒が自己の学習活動を振り返って次につなげることが必要であるため、まずは振り返りを行うことが重要であると考えた。

さらに、生徒の「主体性」を効果的に発揮させるために、自律性を高め、意欲を引き出した状態で振り返りを行うための手立てを設定することとした。今回の検証授業に向けて設定した手立てとその設定理由などを次に述べる。

### （1）生徒が見通しをもつことができる「単元ごとの学習計画（シラバス）」

各単元の評価規準や評価方法等の評価の方針を生徒と共有しておくことは、評価の妥当性や信頼性といった面からも有効であり、生徒が自らの学習を調整していく際にも効果的である。さらに、形成的評価という面でも、高校生という発達の段階を考えれば、自分の置かれた状況と実際の授業の計画や評価の方針などを考慮して、自ら学びを調整し、振り返ることも可能である。

この「学習計画」を川崎市立高等学校の、ほぼ全ての教科・科目で作成しているシラバスを改良したものと組み合わせ用いることとした。シラバスとは元々、大学等で担当教授が年間の授業計画を学生に伝えるためのものである。高等学校では一つの教科の中にも複数の科目があり、2年次以降には生徒が自分の進路等に合わせて、各自で科目を選択するため「シラバス」を用意している。新入生の科目ガイダンス等でも説明用に使われるため、全ての教科・科目が網羅されているのが基本である。その内容は、その科目で1年間に行う授業の計画や必要な教材、評価の方法や材料などである。ただ、現行のシラバスは分量が1科目でA4の用紙1枚程度であり、書式の統一性が重視されるなど、各科目の個別の内容は伝わりにくくなっている面もある。そこで、一つの単元を一枚の用紙でまとめ、生徒と共有できるようにして、単元開始時に配ることとした。

<sup>8</sup> 「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016 p. 11

## (2) 各教科の見方・考え方を働かせることができる課題設定

これまでの高等学校の授業では、目の前の生徒が抱えている問題や意欲に注目した工夫よりは、知識を習得することを目標とした課題設定に比重が置かれてきた。

そこで、教師が課題を設定する際に各教科の「見方・考え方」を生徒が働かせることができるものとした。「見方・考え方」については新学習指導要領に「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐもの」とある。表現は各教科で異なるが、よりよい社会や自らの人生を創り出すという方向性は共通あり、さらに全ての教科で生徒が「見方・考え方」を自在に働かせて資質・能力を育むことと整理されているので、学校全体での取組を行うのに最適であると考えた。

## (3) 学びの「つながりの方向性」の整理と想定

検証に向けて授業を試行する中で、最終的には、生徒が自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自己の学習活動を振り返り、社会につなげることを目標とするが、科目の特性や単元の長さによっては、振り返りで直接、自己のキャリア形成の方向性や社会とつなぐことが難しい場合や、つなげる先が大きく制限されてしまう場合がある。

しかし、直接的にはつなげることができなくとも、学びをそこで終わらせるのではなく、繰り返しつなげていくことで、主体的に学び続ける生徒を育成できると考えた。

そこで、次のような「つながりの方向性（次の学び）」を想定して検証に臨むこととした。

このほかにも様々なつながりの方向性を想定することができるが、つながりの方向性（次の学び）を意図的に授業に取り入れることにした。

今回の検証授業では授業改善と研究の効果を測るために、授業者が生徒の実態を把握したうえで、生徒が当該単元での学びをどのような学びにつなげるかを想定してから臨んだ。

### 「つながりの方向性（次の学び）」

- ・学習内容へのつながり（既習・未習）
- ・人や社会へのつながり（他者・生活）
- ・過去、現在、未来とのつながり

## (4) 振り返りの記述の評価について

振り返りなど生徒の記述を評価するにあたっては、今年度行った教員に対するアンケートにも、評価する側が、生徒同士の比較に影響を受けたり、記述内容の質と量や文章の上手い下手などによって、適切に評価できていなかったりするという懸念が多くみられた。

そこで今回は、次の2つの段階で評価することを予め示して検証に臨んだ。

### 「評価の2つの段階」

- ① つながりを新たに発見しようとしている  
(生徒本人の中で“新たな”つながり)
- ② 発見したつながりについて、自分なりの答えを得ている。

## (5) 事後アンケートの記述

生徒の事後アンケートの記述から、「単元ごとの学習計画」・「見方・考え方を働かせることができる課題設定」・「振り返り」が生徒本人の意欲や考えにどう影響したか、また生徒本人がその影響をどう捉えているか検証する。

### 3 検証授業

#### (1) 検証授業1 A高等学校 1年

科目 「科学と人間生活」

単元 「微生物の利用（醤油の製造）」

#### ①生徒の実態

理科の授業に対しては、苦手意識をもつ生徒も多い。単位数は2単位であり、授業時間が少ないが、教えなければならない範囲が広い。

実験や班での活動には積極的に取り組む生徒がほとんどである。以前に行った「防災」の単元など、身近な問題への関心が高い。

#### ②課題

「醤油の塩分濃度の測定」（実験）

様々な種類の醤油の塩分濃度を計測し分かりやすいグラフにまとめ、比較する。

#### ③課題設定の理由

醤油は身近なもので、生活に直結している。様々な種類があることを知っている生徒も多い。人間が微生物を用いて暮らしを快適にしてきたという科学の進歩が身の回りにあるということを理解するのに最適である。

#### ④「理科の見方・考え方」

自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること。

#### ⑤つながりの予測

現在の生活とのつながりや、中学校までの家庭科で学習した調味料など、他の科目へのつながり。

#### ⑥生徒の振り返りの評価について

ア 「新たなつながりを発見しようとしている」段階にあると判断した記述

振り返り①→次の授業（微生物を利用した食品等については次の単元で触れる予定）につなげようとしている。今回の実験には含まれなかった物（つまり醤油）も試してみようとしている。

イ 「発見したつながりについて、自分なりの答えを得ている」段階にあると判断した記述

振り返り②→醤油の塩分濃度の実験から、日常生活につなげ、実際に料理をする時の判断に生かせると考えている。

### 「学習計画」

科学と人間生活		学習計画4	
1 題材名 「微生物の利用（醤油の製造）」			
2 単元題材で育成する資質・能力<評価規準>			
ア関心・意欲	イ科学的な思考	ウ技能	エ知識・理解
学習内容に主体的に取り組んでいる。	得た知識や実験結果から結論を導くことができる。	醤油の塩分濃度に関連する実験や計算を正しく行う。	微生物を使った身近な食品を知り、理解を深める。
3 授業計画			
	評価の基準と評価方法	学習活動	
1	ア記述	微生物とそれを利用した食品	
2	ア記述	醤油	
3	ア記述 イ方法の記述 エ小テスト7微生物の利用	醤油の塩分濃度の求め方の考察	
4	ア記述 エ小テスト8塩分濃度の求め方	実験方法の確認	
5	ウ操作	実験準備	
6	ア記述 ウ実験・比較の記述	醤油の塩分濃度の測定	
7	アイ記述	まとめ・振り返り	
*定期考査でア～エの観点を全て見ます。			
4 この単元で育成する資質・能力が活かされる<未来>			
・実生活 ・栄養系の学科 ・生物系の学科 ・来年の生物基礎の学習			
5 振り返り（この単元で）			

#### 振り返り①

微生物の授業で酵母と細菌、漬物や酵母と細菌を作った食品も多々あると思うので、(漬物や酵母で作った食品で身近な)かいた。また醤油の実験が何となくやるとか、よくあるか、友人と楽しく安全に醤油の種類、塩分濃度を調べてみることにしよう。たまたま醤油の実験の塩分濃度を調べてみる。

#### 振り返り②

自分前まで醤油の濃度は名前が違っても、味や塩分量はそれほど変わらないと思っていた。今日の実験で平均をばらばら、橋がらや内臓をばらばらと分けておいて、その結果成分が47.2%、17.2%、買った物と醤油を買ったのは醤油、何となく分かった。この分かったのをよく見て、7月21日合点が醤油に合わせた料理も、もっと美味しくなると思ってる。

## ⑦考察（振り返りから）

薄口醤油と呼ばれる醤油が、塩分が薄いわけではないという発見や、減塩醤油がきちんと表示の通りの濃度になっていることから、今の生活とつなげて、「家族に勧めてみたい」や「食品の成分表示が信頼できる」といった記述が多かった。また、「次回以降の授業に生かせるのではないか」という内容もあった。しかし、当初予測した、他教科や分野との明確なつながりを記述したものは少数であった。

## ⑧授業後のアンケート記述から

ア 「学習計画」について

アンケート記述①

学習の予定や目標、評価の方法が予め示されていることについて、今までの授業と比べてどう思いますか。

どう進めかをあらかじめ示して下さると、予習がやりやすくて私にありがたいです。あと、教科書に  
1:1つからた時、対策が外れとよるのび、このまま「学習計画」を1作して下さると  
嬉しいです。

アンケート記述①→この記述のように、先に準備ができる等、「予習をし

やすい」というものが多かった。さらに他の記述として「予めポイントを意識して授業を受けるので分かりやすく、目標がしっかりしていると取り組みやすいし興味がわく。」「評価方法があると、どの部分を、自分がどう思ったのか伝えようと意欲的・積極的に書くことができた。」というものがあつた。

イ 「課題」について

アンケート記述②

この單元の中に、今回の課題<実験：醤油中の塩分濃度>があつたことで、どのような影響があつたと思いますか。

自分で「実験を通して学べるので」とも意欲がわくし、たのしみながら授業が受けられた。

アンケート記述②→意欲の高まりを生徒本人が感じているという内容の記述。

アンケート記述③

アンケート記述③→課題設定の理由が適切であつたことを示す記述。

私は科学が身近にあることを改めて実感しました。

アンケート記述④

アンケート記述④→課題設定の有効性に関する記述。

楽しく考えられました。自分の考えと正解があつたときに喜びを感じた。醤油を用いることで「身近に感じられた。」

ウ 「振り返り」について

学んだことを、(次に)つなげるという学習の仕方についてどう思いますか。

アンケート記述⑤→次につなげるという視点で振り返ることが、復習することになり理解が深まるという記述。

アンケート記述⑤

授業の最後に、自分は何を学んだのか、何に対して疑問に思ったかなどが確認できて記憶の定着につながっていると思う。

アンケート記述⑥

アンケート記述⑥→次につなげるという学習の仕方自体に面白さを感じ、意欲が高まっているとみられる記述

一つ学ぶと一つ疑問が生まれ、それらを生かして解決につなげるという事にとってもおもしろいと感じた。

(2) 検証授業2 B高等学校 2年

科目 「数学Ⅱ」

単元 「三角関数」

①生徒の実態

情報を学ぶ専門学科であり、高校卒業後は大学などの上級学校へ進学する生徒がほとんどである。  
専門学科を研究していくうえで、数学は必須であるが苦手だと感じている生徒もいる。

②課題

「日長時間のグラフ作成」から、「三角関数の特徴」の一つである「波」の性質に着目すると、どのようなことができるようになるか考える。

学習計画表 3章 三角関数				
No	テーマ	P	目標	目安
24	一般角, 弧度法	ア 108-111	角の拡張について理解する。弧度法の定義を知る。扇形の長さ、面積を求める。	1.5
25	三角関数	イ 112-116	三角関数の定義を用いて三角比の値を求める。	1
26	三角関数の性質	ウ 117-119	性質について知る。	1
27	三角関数のグラフ	カ 120-125	正弦曲線について学ぶ。また、グラフの平行移動、周期、拡大、縮小について。	3
28	三角関数と方程式・不等式	キ 126-128	三角関数を含む方程式、不等式、関数の最大値・最小値	2
29	1節のチェック問題	129		1
30	小テスト		ア, イ, ウ, カ, キ	11
31	加法定理	エオ 130-134	加法定理の証明, 加法定理を用いた計算, 正接の加法定理	3
32	加法定理の応用	キ 135-140	2倍角の公式, 半角の公式, 複雑な方程式, 和積公式	3
33	2節のチェック問題	141		1
34	章末問題	142		1
35	小テスト		エ, オ, キ	9
20				
<p><b>【知識・理解】</b>                      ア 角の概念を一般角まで拡張する意義や弧度法による角度の表し方について理解する。                      イ 三角関数の値の変化やグラフの特徴について理解する。                      ウ 三角関数の相互関係などの基本的な性質を理解する。                      エ 三角関数の加法定理や2倍角の公式, 三角関数の合成について理解する。</p>				
<p><b>【思考力・判断力・表現力】</b>                      オ 三角関数に関する様々な性質について考察するとともに, 三角関数の加法定理から新たな性質を導くことが出来る。                      カ 三角関数の式とグラフの関係について多面的に考察することが出来る。                      キ 二つの数量の関係に着目し, 日常の事象や社会の事象などを数学的に捉え, 問題を解決したり, 解決の過程を振り返って事象の数学的な特徴や他の事象との関係を考察したりすること。</p>				
<p><b>【主体的に学びに取り組む力】</b>                      ク 数学のよさを認識し数学を活用しようとする態度, 粘り強く柔軟に考え数学的論拠に基づいて判断しようとする態度, 問題解決の過程を振り返って考察を深めたり, 評価・改善したりしようとする態度や創造性の基礎を養う。</p>				

③課題設定の理由

情報の分野の中でも特にプログラミングにおいては、三角関数の「波・測量・回転」という性質が利用されることが多い。自分たちが学ぼうとしている専門的な学問が、現在の社会にどのように生かされているのかを考えることで、学習の意欲を高めることができると考えた。

④「数学的な見方・考え方」

事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的、体系的に考えること。

⑤つながりの予測

専門科目と数学的思考とのつながり。

振り返り①

⑥生徒の振り返りの評価について

ア 「新たなつながりを見発しようとしている」段階にあると判断した記述

将来、プログラマー(予定)として三角関数は無くしてはならないものになり、必ず使うと思うので、これから三角関数を忘れないように大人になった時にすぐに使うようにしたいなと思いました。また、今でもパソコン部でもゲーム製作の中で使っているのも、と奥を深めて、マスターし、ゲームに生かせるようにしたい

振り返り①→自分の将来の目標とつなげ、使えるようにしたいという記述。

### 振り返り②

イ 「発見したつながりについて、自分なりの答えを得ている」段階にあると判断した記述。

プログラミングとか機械を作業の仕組みを変えては一回使えばいいから
その後その作業がめっちゃ楽になる。だから作る。っていうのがプログラミングの考え方
これって三角関数はゼロに同じだと思っ。一回の比がわかれば何度でも使え

振り返り②→自分の将来の目標と絡

め、プログラミングと機械、さらには三角関数との共通点を見出し意味があると考えている記述。

### ⑦考察（振り返りから）

数学がどのように社会の役に立っているかということは、生徒に理解がしやすかったようである。ただ、「三角関数」に限定すると専門性が高いため、授業の中で教師が指導する部分が増え、生徒が主体性を発揮する部分は限定されるという傾向がみられた。

### ⑧授業後のアンケート記述から

ア 「学習計画」について

学習の予定や目標、評価の方法が予め示されていることについて、

今までの授業と比べてどう思いますか。

#### アンケート記述①

アンケート記述①→学習の調整について効果があったことを示す記述。

前回自分が何をやっていて、どの程度進んでいるのかなどが一目で確認でき、今日何をすればいいのか分かるので取り組むのも思いのまま。また理解度によって復習したりなどして自分で調整もし易いと思っております。
---

イ 「課題」について

この單元の中に、今回の課題<探究学習>があったことで、どのような影響があったと思いますか。

アンケート記述②→授業と自分を

#### アンケート記述②

含めた社会とのつながりに関する記述。

自分が思っていたより三角関数がい身近なものなんだなと感じることができた。
--------------------------------------

アンケート記述③→意欲の高まりについての記述

#### アンケート記述③

実用性や意味が感じられた方が勉強に対するモチベーションが上がるので、前よりも取り組む意欲が自分の身の上の面で生まれたと感じます。
--

ウ 「振り返り」について

#### アンケート記述④

学んだことを、(次に)つなげるという学習の仕方についてどう思いますか

今回でも自然と出来たことよりも強くなる要素がでてきた。
それによって難しく考えていたことが簡単に解けるようになったので、7割がたで良いと思っております

アンケート記述④→今までの学習

#### アンケート記述⑤

の仕方と比較して、無理なく取り組めて効果的であることを示す記述。

思考するのを身に付けることでこの先AIで簡単な仕事をこなせる世の中になってきたから、これだけ簡単な仕事をやるのに必要な勉強はこれくらい、
--

アンケート記述⑤→高校生として、これから必要な学習の仕方だと考えている記述。

(3) 検証授業3 C高等学校 1年

科目 「国語総合」

単元 「技術が道徳を代行する時」(評論文) 池内了

「学習計画」

第1学年 国語総合(現代文分野)			
1、題材名 池内了「技術が道徳を代行する時」			
2、単元題材で育成する資質・能力(評価基準)			
ア 学びに向かう力、人間性等	イ 思考力・判断力・表現力	ウ 知識及び技能	
個別の情報と一般化された情報との関係について理解し、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、要旨や要点を把握しようとしている。	文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握している。	個別の情報と一般化された情報との関係について理解している。	
3、授業計画・評価の基準と評価方法			
Plan	A	B	C
①通読する			
②本文を例と論に分ける			
③要約・合成をプリントで練習する ア/プリント1	文の要点に注意しながら適切に要約・合成をしている。	適切に要約・合成をしている。	適切に要約・合成をしていない。
④本文を意味段落ごとに要約する アイ/プリント2	本文の要点に注意しながら適切に要約・合成をしている。	適切に要約・合成をしている。	適切に要約・合成をしていない。
⑤段落ごとの要約をつなげる ア/イ/ウ/プリント2	段落ごとの要約を既習の接続語を用いてつなげている。かつ、文章の構造・関係を理解している。	段落ごとの要約を既習の接続語を用いてつなげている。または、文章の構造・関係を理解している。	段落ごとの要約を既習の接続語を用いてつなげていない。
⑥つなげた要約から筆者の主張を読み取る ア/イ/ウ/プリント2	論と例の関係を理解している。かつ、筆者の主張を適切に捉えられている。	論と例の関係を理解している。または、筆者の主張を適切に捉えられている。	筆者の主張を適切に捉えられていない。
4、この単元で育成される資質・能力 「文章を要約・合成する力」・「筆者の主張を適切に捉える力」			
5、振り返り～つながる学び～ やり過ぎたこと・次の学習に生かせること・指示されなかったけどやってみたこと・その上で分かったことなどを書いてください。私の見取れていない皆さんの主体性が知りたいです。			

①生徒の実態

専門教科の実習レポートや将来就職したときの対人コミュニケーションのため、会話や文章で表現することの重要性は理解しているが、表現することや文章を書くこと自体に苦手意識をもつ生徒が多い。

②課題

「文章の要約(合成)」

本文の読解から始めるのではなく、文章を短く切って、必要な部分を残し(要約)、最後につなげる(合成する)ことで内容の理解に結び付ける。

③課題設定の理由

個人で取り組むことができる。文章の形から要約していけるので、難しい語句による影響が少ない。作成した文を、他者と比較することができる。

④「言葉による見方・考え方」

生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。

⑤つながりの予測

文章を読解することや、実習レポートなど文章を書くことなどへのつながり。

⑥生徒の振り返りの評価について

ア 「新たなつながりを発見しようとしている」段階にあると判断した記述

最初のプリントは適切に要約し合成できたと思います。要約するのが難しかったけど、要約することで、より筆者の意見を見つけやすくなるなどおもいました。接続語を上手く当てはめるのが難しかった。最終的には筆者の意見もしっかり読み取れたのでよかったですと思います。

→要約をすることで、本文の読解につなげようとしている記述。

イ 「発見したつながりについて、自分なりの答えを得ている」段階にあると判断した記述

今回の授業を受けて、要約や合成のやり方について知れた。これは受験のとき、小論文などにも使えてくるようになると思いました。また、発表の時の文などにもうまく活用すれば、自分が表現したいことも多く表現でき、内容の濃いものが発表できるのではないかなと思いました。

→要約をして文章のポイントをつかむことが、自分で文章を書いて表現する場合にも生かせると考えている記述。

⑦考察（振り返りから）

ほぼ、事前に想定したつながりが多かった。一部、新聞や読書などに生かせるという記述や、身の回りにある様々な文章へつなげる可能性の記述もあったが、社会につなげるという内容の記述は見られなかった。

⑧授業後のアンケート記述から

ア 「学習計画」について

アンケート記述①

学習の予定や目標、評価の方法が予め示されていることについて、今までの授業と比べてどう思いますか。

目標があることで、達成しようという気持ちもあり、  
意欲的に授業に取り組むことができた。目標が示されている方が授業に参加しやすい良かった。

アンケート記述①→目標をはっきりと意識することで意欲が高まると考えている記述。

イ 「課題」について

アンケート記述②

この單元の中に、今回の課題<文章の要約（合成）があったことで、どのような影響があったと思いますか。

周りの人から評価されているので、自分の意見、先生の意見、  
友達の見解などを自ら積極的に聞き、確かめることが  
情報を共有するうえで一番大切なことに気付きました。  
今後の授業では、人の意見を聞いて共感したいと思いき

アンケート記述②→課題設定が有効であったことを示す記述。

アンケート記述③

アンケート記述③→生徒の実態に合わせた課題で意欲が高まったことを示す記述。

自分で文章の言葉を選べ、短くまとめることで、  
重要な言葉を見つけやすくなった。個人的には今  
回のプリントの授業は楽しいと感じた。

ウ 「振り返り」について

アンケート記述④

学んだことを、(次に) つなげるという学習の仕方についてどう思いますか

学びに学びを重ねる事で、新しい理解に繋がる  
事が出来るので良い事だと思います。

アンケート記述④→学びをつなげることの効果を理解していると考えられる記述。

アンケート記述⑤

アンケート記述⑤→授業以外の日常生活にもつなげていくことができることを示す記述。

感想を"1"で"1"ではなく、<sup>次にどうするか</sup>つなげるか、ということ  
を考えると"1"で"日常生活"で"生かしたり、どう  
にかつなげるか、を意識できて良いと思う。

(4) 検証授業4 D高等学校(定時制)4年

科目 「日本史B」  
 単元 「武家社会の形成」

①生徒の実態

学習に対して積極的な生徒もいれば、苦手意識が強い生徒もいて、その差が大きい。予習・復習をする時間もあまりない。歴史については小学校・中学校での学びの蓄積があることや、ゲームや漫画などとのつながりで知っていることが多い。

②課題

「なぜ鎌倉幕府は長く続いたのか」(ワークシート)  
 武士たちの気持ちや判断を「自分だったらどうするか」という視点で考えていく。

③課題設定の理由

「武士がどのようにして全国にひろがったのか」というテーマで前の時間から学習している。要因の一つである「承久の乱」を通して、「その時の武士の気持ち」になって考えることで、意味付けがしやすいと考えた。

④「社会的事象の歴史的な見方・考え方」

社会的事象を時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたりして働かせるもの。

⑤つながりの予測

小学校・中学校での学習とつなげたり、漫画やゲームなど身近な事柄とつなげたりなど。

⑥生徒の振り返りの評価について

ア 「新たなつながりを発見しようとしている」段階にあると判断した記述  
 振り返り①→歴史上の様々な事実について、原因という視点でつなげようとしている記述。

イ 「発見したつながりについて、自分なりの答えを得ている」段階にあると判断した記述

振り返り②→歴史的な事実から生まれた言葉を、自分の興味があるものをつなげて理解することができている記述。

日本史B 学習計画(2)			
<b>日本史B 学習計画(2)</b>			
4年 組 番 名 前			
(1) 題材名 「武家社会の形成」			
(2) 単元題材で育成する資質・能力【評価基準】			
ア. 関心・意欲	イ. 思考・表現	ウ. 資料活用	エ. 知識・理解
歴史に関心を持ち、学習活動に主体的(自分で考え行動する)に取り組んでいる。	学習してきた内容から、本学習の内容を考え、表現している。	教科書や資料を活用し、歴史的な事象(できごと)について考え、表現している。	基本的な学習内容をしっかりと理解する。
(3) 授業計画			
	評価の基準と評価方法	学習活動	
1	◎記述 ◎発言/記述	院政と平氏の台頭(1)	
2	◎記述 ◎資料活用 ◎確認問題	院政と平氏の台頭(2)	
3	◎記述 ◎資料活用 ◎確認問題	鎌倉幕府の成立と発展(1)	
4	◎記述 ◎発言/記述	鎌倉幕府の成立と発展(2)	
5	◎記述 ◎発言/記述 ◎確認問題/小テスト	鎌倉幕府の成立と発展(3)	
6	◎記述 ◎発言/記述	蒙古襲来と幕府の衰退	
7	◎記述 ◎確認問題/小テスト	鎌倉文化	
※ 定期考査では◎～◎をすべて観る。			
(4) この単元で育成する資質・能力が活かされてく未来>			
・日常生活 ・観光業 ・文系の大学 ・日本の文化・歴史 ・地理 A/世界史 Aとのつながり			

振り返り①

・武家が初めて政権を確立させた時代は140年近く続いたのに比べ、140年近く続いたのは頼朝の力があって、封建制度も北条政子の演説、承久の乱の勝利などの区々出来事があった。もっと深くまで知りたかった。

振り返り②

源氏が三代で亡くなったことを初めて知った。北条政子も名前を知っていたが、こんな風に活躍した人だったのはびっくりした。  
 - 所懸命の意味も了々見ている時にセリフで聞いたりして一生懸命とは違う気がしていたが、ここで意味を知ることができた。

### ⑦考察（振り返りから）

「将来、子供や友達と旅行に行く際に、授業で学習した内容から様々なことを教えられたらいいと思う」や「ゲームや舞台など自分が興味を持っていたものが学習後にさらに好きになった」という記述がみられた。しかし、何かにつなげることが難しいと書いている生徒が多かった。

### ⑧授業後のアンケート記述から

ア 「学習計画」について

学習の予定や目標、評価の方法が予め示されていることについて、今までの授業と比べてどう思いますか。

アンケート記述①

アンケート記述①→授業に取り組みやすくなったという記述。

評価があらかじめ分かっているから授業に取り組みやすい。  
今までより授業の目的が明確になりやすい。

イ 「課題」について

この單元の中に、今回の課題<武士の気持ちになって考えよう>があったことで、どのような影響があったと思いますか。

アンケート記述②

アンケート記述②→課題を通して、考えが深まったことを示す記述。

中学校の時には考えたり授業でもそこまでやっていなかったのに  
日本史になって改めて深くかかると色々と考えたり思える  
事が増えました

アンケート記述③→課題を通して自分で考えることにより、興味をもつことができたという記述。

アンケート記述③

黒板に書いてあることを書くだけじゃなく自分で考えて  
書いたりすることでその單元について理解をしたり、興味を  
もつことができた。

ウ 「振り返り」について

学んだことを、(次に) つなげるという学習の仕方についてどう思いますか。

アンケート記述④→学びと学びのつながりを意識し始めているという記述。

アンケート記述④

社会に出て役に直接立つかはわかりませんが自分の  
無意識下で物事の視野が広がっていると思っています。

アンケート記述⑤→学びをつなげることが生活を豊かにすると考えている記述。

アンケート記述⑤

私は舞台が好きで、日本中をツアーにしたものも明かあるので、知る  
前と知った後では観劇する時見方が変わる部分も明かあるのでと  
思いました。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 成果と課題

##### (1) 成果について

川崎市立高等学校の教師にアンケート調査を行うことで、これからの予測困難な時代に求められる資質・能力を見取るための観点として、特に「主体的に学習に取り組む態度」を評価することに対して、教師が困難さを感じていることが改めて分かった。生徒の粘り強さや自己調整などの意思的な側面は、定期テストの点数のように、数字ではっきりと現れるものではない。また、高校生という時期を考えると、生徒の内面は、変わりやすく、外に現れにくいものである。そこで、育成を目指す資質・能力の「(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養)」の、「学びを人生や社会に生かそうとする」の部分に着目することで、生徒の意思的な側面を可視化することができた。

また、「有機的統合理論」を用いて「主体的な学び」を整理することで、どのような方向性を持ち、どの程度まで深めていけば「主体的な学び」が実現したといえるのかを、振り返りにおいて、ある程度見取ることができた。

振り返りを効果的に行うために取り入れた、「見通しをもつことができる單元ごとの学習計画」で、評価の方法や方針を共有しておくことは、生徒の自己調整を促すことに効果があるということが、生徒のアンケートからも確認できた。

さらに、「次の学びにつなげる」という視点については、高等学校では、振り返りはあまり行われてこなかったが、生徒の事後アンケートの記述には、「復習している感覚に近い」というものが多くあった。学習の流れとして自然なものであったといえるのではないだろうか。また、「復習」について、今までの復習は、主に授業で習った知識を忘れないようにするためのものであったが、今回行った振り返りでは、「單元の中で何を学習して、その時自分が何を考えたのか」を合わせて理解しているので、次の單元や他の教科でも使えるのではないかという感想があった。このように、「次の学びにつなげる」という視点自体が、振り返りを行いやすくするというだけでなく、生徒のより意欲的な学びを引き出しやすいということもみえてきた。

##### (2) 課題について

課題としては個人として振り返りの蓄積ができなかったことがあげられる。様々な單元での学びを、自分なりに意味付け、つなげることで、自分の考えの傾向や特性に気付くことができるが、そこまで至ることはできなかった。

「学びを次につなげる」という視点については、科目の特性や単元の長さによっては、つなげる先を想定しにくい場合があったり、教師が指導する部分が多くなってしまい、本来の「主体性」からは遠ざかってしまうのではないかと思われる場合もあつたりした。今回は各校で一科目の検証であったが、今後は複数の教科で実施し、教科・科目を越えて学びと学びをつないでいくという学び方も求められるのではないかと思われる。

「振り返り」の記述に対する評価についても、評価の2つの段階を設けるという方向性を示すことはできたが、各教科の専門性からみると十分な検証が行えたとはいえない。今後は各教科内において、複数の教師で、同じ視点から生徒の記述を検討し、各教科の基準を話し合い、作っていく作業が必要となってくる。

## 2 研究全体について

今回の研究では、生徒が授業において「主体性」を発揮させることができるようにするための授業改善について検討した。教師が生徒の「主体的な学び」を見取るため、学習に関する自己調整の側面を、生徒が学びに対して意味があると考え、次の学びにつなげようとしているかで捉え、粘り強さの側面を自律性の程度に着目した「有機的統合理論」で可視化した。

今回、指導改善の手立てとして取り入れた「振り返り」は目新しいわけではない。生徒と教材をよく見て、生徒の実態に合った課題設定を行うことも、今まで当たり前に行われてきたことであるし、「振り返り」は、生徒にとっては慣れ親しんだ学習活動の一つであり、今まで通り勉強したことを復習しているという感覚をもつ生徒が多いということもわかった。

それでも、振り返りの記述には、よく考えて書いたと思われるものも多くあり、中には教師の予想を上回るようなものもみられた。

このように見てみると、高校生は学びに対してしっかりと向き合い、考えているといえるのではないだろうか。我々教師には、生徒がしっかりと考えたことを、表現しやすい視点や方法を用意することがより一層求められているのではないだろうか。そのような、表現しやすい方法の一つとして、生徒自身が学んだこと意味があると考え、次の学びにつなげるという視点が有効であり、生徒に「主体性」を発揮させることができたのではないかと考える。

今後の展望として、本研究をどう指導に生かすのかという点について次のようなことが考えられる。まず、「単元ごとの学習計画」を授業の見通しだけでなく、生徒自身が学習のねらいや進捗状況を把握することができるように共有すること。次に、「課題設定」において、生活や社会との関連、生徒の実態や経験を踏まえた課題設定の工夫をすること。さらに、学びのつながりを授業に組み込むことで、生徒が授業内で学びの意味に気付くことができるようにすること。このように指導を改善することで、より生徒に「主体性」を発揮させる授業へとつなげていきたい。

最後に、研究を進めるにあたり、ご支援、ご助言くださいました講師の先生、また校長先生をはじめアンケートにご協力いただきました教職員の皆様に、心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

### 【参考文献】

- 高木展郎・三浦修一・白井達夫『新学習指導要領が目指すこれからの学校・これからの授業』小学館 2017年
- 櫻井茂男『自律的な学習意欲の心理学 自ら学ぶことはこんなに素晴らしい』誠信書房 2017年
- 高木展郎『評価が変わる、授業を変える』三省堂 2019年
- 櫻井茂男『自ら学ぶ子ども 4つの心理的欲求を生かして学習意欲をはぐくむ』 図書文化社 2019年

### 【指導助言者】

- 浦和大学こども学部客員教授（川崎市総合教育センター専門員） 工藤 文三
- 川崎市総合教育センター指導主事 山中 美奈子
- 川崎市総合教育センター指導主事 鬼頭 洋司